

第1回ぶんぱくあり方検討会 意見交換まとめ（項目別）

1. 全般

- ・博物館の主体となる人たちが確立したら、そういう外の関係者を交えて進めるのもよいが、主体が確立していない段階で外部がいろいろ言っても現場がアップアップになる。
- ・現状を把握したうえで、理想と現実のギャップを埋める作業が必要。
- ・成功基準がないと、何年か経ったときにできたか、できていないかの判断ができない。その状態が怖い。
- ・ぶんぱくがどういう状況なのか、来館者から見てどうなのか、それから、ここで働いている人たちからはどうなのか、といったファクトを集めていかないと、ベクトルが定まらない。

2. 概念

- ・ぶんぱく設立経緯を見るのと同時に、文化概念を明確化していく必要がある。
- ・天文学館が「時のまち」というキーワード、図書館が「本のまち」。文化博物館は？「文化のまち」はあまりにも広域すぎてわかりにくい。文化博物館の本質を再認識して、確立していかないといけない。

3. 館の運営体制

- ・市の歴史・文化に関する業務の継続性を保つために業務分割方式を導入した。市の担当職員は正規職員になるのか。継続性が大事と言っている割には、市の配置が不十分。
- ・継続性が大事ならば、場合によっては、指定管理期間の検討も必要
- ・博物館の基本機能を押さえることが大事。自分たちの足元をしっかりと固めていく、そのプロセスをしっかり踏んでいくことを考えてないと、ふらついてしまう。優先順位を考えることが必要。
- ・見る人の興味を惹く展示をするために、どうやって資料収集を、調査研究をする機能をどれだけ持てるかが、やりたい展示が実現できるかどうかの鍵。
- ・市民参加型調査や市民と一緒に調査研究をして展示を作ることができれば一番いいが、そのためにはそれをバックアップする研究者がいないとできない。市民参加型調査は市民だけではできないのが現実で、その機能をこの博物館でどうパワーアップされるかがすごく大事。
- ・展示室の映像資料そのものが歴史資料みたいになっている。例えば、いかなごは絶滅危惧種で、映像のいかなご漁そのものも民俗的に絶滅の危機になっている。だから今調査しなければ、となったときに、誰が調査をするのかという話になる。

4. 使命、ビジョン

・博物館の使命を考える時に今までを更地にして考えるのは博物館的にはありえない。今ある資料、今ある活動、今あるユーザーというベースの上で未来を考えなくてはいけないので、ここまでどういうふうになってきたんだろう？という経緯を丹念に辿って、じゃあどういう未来を、というのを考えることが必要。

- ・ミッション、使命をしっかり作っていく必要がある。
- ・ミッションを考える過程自体があり方を考えることにつながっていくと思うので、ミッションを作ることを一つの目標とするのはありかもしれない。

5. ワークショップ

- ・オーディエンスリサーチで聞かないとわからない。知らないままで展示は作れない。
- ・ワークショップで、ターゲットになる人たちから聞くのはすごくいい。
- ・博物館に関係する人たちがフラットな立場でどんなものを希望するかを語りやすい演出をしたうえで意見を集める。
- ・最終的には、集まった意見を絞る形で展示なり、活動なり、一緒になって複合的に考えていけたらいい。
- ・今後のワークショップの予定で、関係者のワークショップもあるが、一緒に入りたい。
- ・博物館にこない人からどうやって意見を聞くかが難しい。
- ・傍聴者のみなさんもたくさん想いがあると思うのでインタビューしてみたい。
- ・キーパーソンになるような外部の人へのインタビューもあったらいい。
- ・天文科学館は専門性の高い利用者もいれば、子どもたち向けのいろんな企画や明石の独自のプログラムをいっぱい出している。そういうところの考え方とかを聞かせてもらうワークショップもあればいい。

6. コーディネート機能、ハブ機能

- ・明石では今ある様々な文化施設が、活動とか人とかをコーディネートするつながり方をして、新しい展開にしていくのか、あるいは各施設レベルで何か新しいものを考えるのかという大きな問題がある。
- ・文化博物館はハコモノとしてここに来れば展覧会を見られるということだけでなく、もっとコーディネート機能があればいいと思う。文化博物館が核になっていろんなところにつながっていくコーディネート機能というのがキーワード。
- ・市内のギャラリーと文化博物館がつながっていくと、まち全体が美術館になったり、歴史を深める機

会になったり、ということがどんどん生まれると思う。ぶんぱくがハブ機能を担って活用できたらいい。

- ・天文科学館、図書館と文化博物館が一つの連合体として、明石の文化を掘り起こせるような、確立していけるようなシステムがほしい。ぶんぱくだけをどうにかするのではなく、天文科学館や図書館と一緒に連合体としてやっていけるような機能が持てたらいいと思う。

7. 連携

- ・天文科学館という、周辺のユーザーとしっかりした密接な関係を持って博物館活動を展開している成功事例があるので、参考にしながらいろいろやっていくと面白い。

- ・企業と連携して、文化博物館と一時的にでも関わることがあれば、市民としては、文化を今まで使っている製品や身の回りのものに対して循環しようという意識改革のきっかけになるのではないかな。

- ・博物館にはそれぞれ専門分野があるので、文化博物館でこのことについてはここでは聞けないのが弱点であるなら、一時的にそういうところに企業を受け入れることで、市民が文化をもっと知りたいと思えるような機会が作れる。

- ・企業と連携した展示や、地域と連携したコーディネート機能などは全てアウトプット。アウトプットするためのプロセスをどう作っていくかが博物館として大事になる。

- ・明石の文化資源は豊かで多様。明石には工業地帯もある。文化と産業界とのつながりは掘り起こせるのではないかな。(ドイツ・ルール工業地帯の例)

8. 次世代育成

- ・次世代の育成が大事。次世代が大人になった時に、また新しい文化が次々と生まれてくる。明石がそういう循環を生み出すまちになったらいいと思う。

- ・兵庫県立美術館名誉館長蓑豊さんは小学4年生をターゲットにされていて、以前館長をしていた金沢21世紀美術館では小学4年生を無料招待している。それは、4年生の子が今までなんとなく対象物を見ていた目が見える目になるから。何か興味を持つ目を持つのが4年生、10歳ぐらい。そこで培ったものが今度は、見つめるように変わっていく。そうなると問題意識を持ち、自分の課題を持って物を見るようになる。見る目があって、見える目があって、見つめる目。スタートはやっぱり見る目で、そこに文化博物館がならないといけない。

- ・子どもたちが文化博物館に行くことを、展覧会に行くことではなく、文化博物館に足を運ぶことが楽しみになる機能があれば、次世代への影響が変わってくる。

9. 展示

- ・ 共通の体験、経験がある身近なものから入っていくのは展示として面白い。展示の自分化としてオムツの展示は可能性がある。
- ・ どう見せるのかと、どういう方向を深めていくということにつなげていくのかを考えると、現在、展示室にある素材は悪くないと思う。
- ・ 企業と連携した展示や、地域と連携したコーディネート機能などは全てアウトプット。アウトプットするためのプロセスをどう作っていくかが博物館として大事になる。
- ・ 明石に住む外国にルーツがある人たちの文化を知りたいし、その人たちに明石の文化を伝えることも重要。
- ・ 既存の展示やこれまでの特別展示にとらわれない側面に、もう少し光を当てていけるといい。
- ・ 外国の人たちにどう関わってもらうか、その地域に根ざしていくことになるのであれば、外国の人たちの文化も地域の一つの文化的側面として、表現していく必要があるのか、ないのか、というのも重要な要素。(ウェールズ国立博物館の例)
- ・ 委員はそれぞれ博物館関係につながりを持っている人がいるので、展示をどうするかを展示業者や博物館関係者に今の展示を見てもらってアイデアを出してもらってワークショップを開いたり、必要な関係者につなぐこともできる。